

仮設住宅に暮らす子どもたちのエンパワメントを目指した支援プログラム評価 —自治会役員および地域福祉コーディネーターへのインタビューより—

○ 東北福祉大学 阿部 利江 (7795)

プログラム評価、エンパワメント、仮設住宅訪問活動

1. 研究目的

東日本大震災から5年が過ぎた被災地では、今なおいくつもの仮設住宅が並び、平時とは言い難い光景が広がっている。そして『復興』という言葉を象徴する生活再建や地域の再生は容易なことではなく、これまでにソーシャルワークはどのような役割を果たせるのかが問われてきた。

2012年3月、ある地区の主任児童委員より復旧期（被災による生活の非日常から日常へ復帰する段階）における仮設住宅の課題として、①仮設住宅内のコミュニティが希薄であること、②子どもたちの居場所が失われていること、③保護者の精神的ストレスが子どもに影響を及ぼし、ときには虐待につながる恐れがあることを提示された。そこで、主任児童委員が担当する仮設住宅での生活支援に協力し、子どもたちのエンパワメントを目指した支援プログラムの設計と訪問活動に取り組んできた。

本研究の目的は、3年間にわたる仮設住宅での訪問活動を振り返り、自治会役員および地域福祉コーディネーターにインタビューをおこない、支援プログラムを評価することにある。

2. 研究の視点および方法

1) 研究の視点

支援プログラムは、長期化する仮設住宅での生活を予測し、継続的に子どもたちの生活環境の変化を把握しながら、地域の復興（自立）段階に応じた援助が必要であるとの下に設計した。そして、単発的にイベントなどを開催する活動とは異なり、ソーシャルワークの援助過程より子どもたちをエンパワメントしていく継続的な活動を進めた。

なお、本研究では操作的定義を用いり、子どもたちのエンパワメントを、仮設住宅に暮らす子どもが遊びから自らの力を引き出し、成長や発達できる環境の調整が図られることとする。

2) 研究の方法

①手続き

これまで定期的な仮設住宅訪問を実施し、自治会行事に位置づけた活動（「ひろば」）への参加を通して、多世代での交流を意識する遊びや物づくりをおこなってきた（2012年8月～2015年3月）。そして、自治会役員と地域福祉コーディネーターの協力を得て、これ

までの活動を自由に語る時間を設定した（2015年8月）。今回はグループインタビュー形式で調査をおこなった。所要時間は30分である。

3. 倫理的配慮

これまでの訪問活動で得た被災者の情報は関係者のみで共有することに留め、外部に漏れることのないよう十分な注意をおこなってきた。また、日本社会福祉学会研究倫理指針に則り、関係者には事前に本研究で得られた内容は個人が特定されることや今後の生活に影響が及ばないことを伝え、統計的な処理をおこなうことで同意を得た。

4. 研究結果

自治会役員と地域福祉コーディネーターのインタビュー内容から、支援プログラムの評価に照合した重要カテゴリーを抽出した。

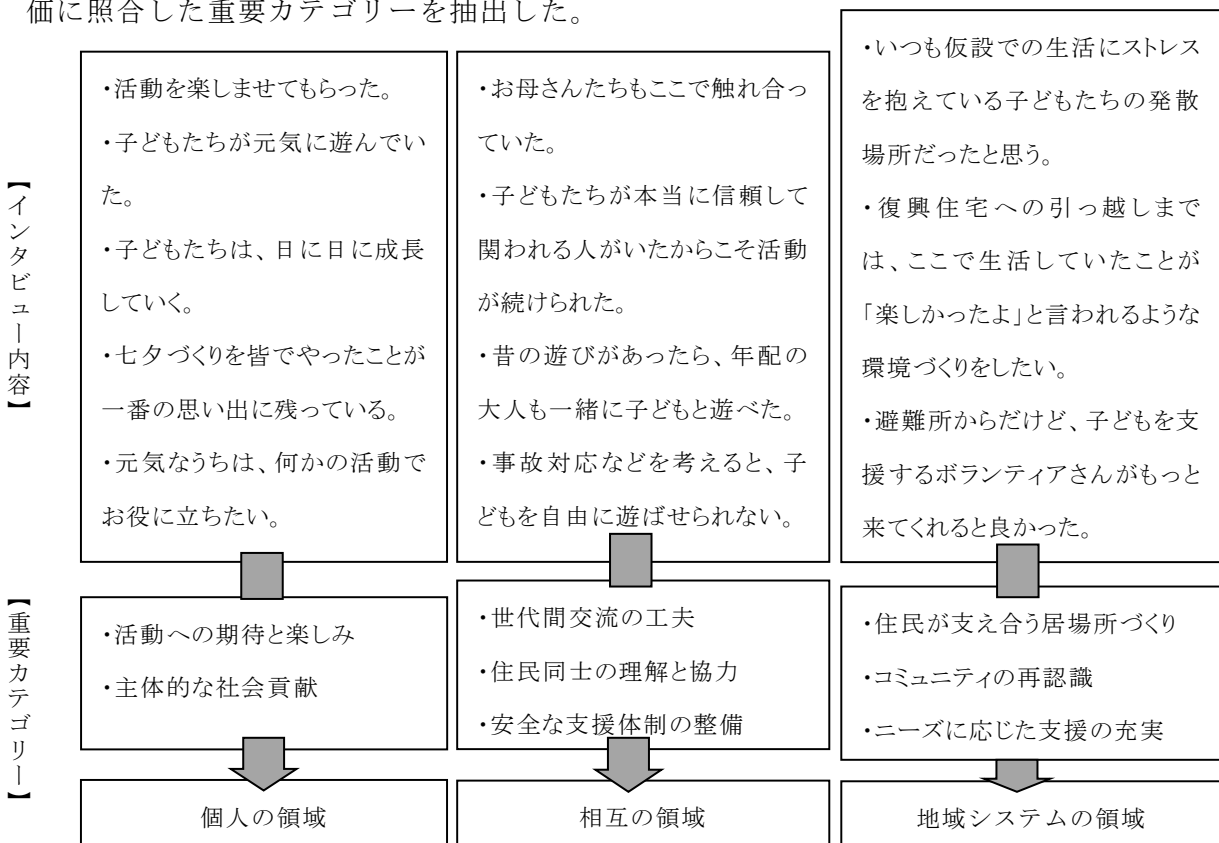


図1. 支援プログラム評価に関する分析

5. 考察

上記の結果より、この支援プログラムは評価を得られたのではないかと示唆する。だが、長期化する仮設住宅での生活は社会的な格差を生み出し、支援環境のなかでしか活動できない子どもがいることも事実にある。そのため、被災した地域の子どもたちがエンパワメントを発揮する日常生活を取り戻せたとは言い難いが、地域の社会資源や仮設住宅に暮らす住民同士のストレングスを十分に活用して、子どもたちの豊かな生活を創り出していくことが、今後の復興過程や地域づくりに求められるのではないだろうか。